

安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

- 1 歴史から学ぶ意味を噛みしめて・・・ 百瀬新治
- 2～3 神と仏の融合・御正体・・・ 原 明芳
- 4～5 武田信玄の天下取りを考える・・・ 池田義光
- 6～8 狼煙に秘められた山城物語・・・ 川崎克之
- 9～13 穂高地域の寺院の沿革・・・ 大沢慶哲
- 14～15 安曇野の地形と村落立地 (4)・・・ 矢花和成

発行責任者 会長 百瀬新治 事務局長 川崎克之
 編集委員長 丸山祐之 企画運営委員長 松尾 宏
 〒399-7102 安曇野市明科中川手1177-3 ☎090-5779-5058



歴史から学ぶ意味を噛みしめて

会長 百瀬 新治

第2次世界大戦終結80年を迎える今年、戦争や平和関係の展覧会等が数多く実施されている。

自分は、安曇野市民を対象に戦時下で生活を過ごした人たちに、その体験について聞き取りや関係資料を調べて記録し、後世の人たちに伝え残そうとする小さな会（市民団体）で活動してきた。この会では、広く市民に呼びかけて体験や資料を募集し、その結果を展示会で多くの方々に知っていただく企画に取り組んでいる。80年の時の経過により、直接体験を持つ人たちが急激に減少し、記憶や資料が風化しつつある現状から、戦時生活を記録等に残し広く伝える必要性和喫緊性を会員が強く感じて実践を進めている。

呼びかけに応じた多くの人たちから、戦時に体験したことを直に話してもらう機会を得た。実に様々な体験談を話していただいたが、そのどれもが戦後生まれの自分にとって貴重であり、80年前の出来事から教えられる事が多々あった。約40名の方の聞き取りから強く印象に残っている事例を紹介する。

Tさんは4歳の時に北朝鮮で終戦となり、収容所生活

の後、両親とともに南に向けての決死の引き揚げをした。幼いため病気や食料不足で生死をさまよい、自分のズボンに食糧と交換しかろうじて帰国した壮絶な体験を持つ。Eさんは母親の胎内にいるとき、父親は戦死し名誉の金鵒勲章をもらった。しかし、男手を失う我が家での戦時生活は筆舌に尽くせぬ程の苦労が伴った。重い荷物を背負い山の畑で農作業をしてきたが、米のご飯が食べられたのは大人になってからと話す。

こんな実体験を持つ方の話を聞く度に、人間誰しも戦争の影響を免れず、いかに平和な世が大切かを教えられる。自分は今まで、歴史を学ぶことに意味を感じ楽しんで知ろうとしてきた。人生の晩年を迎えた現在、過去を知ることだけで良いのか考えることが多い。もちろん歴史を学ぶことが必要であると自覚し、知ることでの楽しさも否定はしない。それに加えて、歴史から学びそれを活かすことこそ、より意義深い方策と考える。今後における自身の生活のなかで、歴史から教えてもらったことを他の場面で活かせることが少しでもできたらと願っている。

神と仏の融合・御正体

原 明芳

御正体は懸仏とも呼ばれ、金属製の円形の鏡板に、仏像を線刻したり、鑄造の仏像（仏体）を貼り付け、神社の祠の正面に吊し、ご神体されました。神社に仏像はおかしいと思うかもしれませんが、このような仏教と神道が結び付いた関係が、中世には生まれていました。

仏教は、六世紀中頃、欽明天皇の時代に、朝鮮半島の百済から日本に伝わってきました。最初は、八百万の神の一つとして扱われ、蕃神（「蕃」は異民族の）と呼ばれました。その後、膨大な仏教の教えが伝わってくると、神と仏の違いに気づきます。そこで、本来は神と仏は融合して一体であったとする神仏習合という思想が生まれます。その考えに基づいて、神は、仏が日本に合わせて現れた仮の姿であらわれたとする本地垂迹という考えが広まりました。

「神の正しい姿」という意味で、仏像が御神体に彫られたり貼り付けられりして「御正体」と呼ばれました。懸仏は、その姿の表現です。

平安時代後半から御正体は作られ始めます。初期は、実用の鏡の鏡面に仏像や神像の姿を入れました。その後、円形の鏡板に仏を毛彫や線刻し、円形の木板に貼り付けるようになります。鎌倉期になると、鏡板に鑄出した仏像を貼り付けるようになります。また吊り下げのための二つの穴も、当初は鏡板に空けられますが、徐々に円形からはみ出すようになり、新しくなると吊り下げ部分が別に作るようになります。その他にも銅板に簡単な仏像を墨で描き二つ穴を空けた背後の木板を持たないもので、さまざまな形があります。

御正体は、人々に神と仏が融合した神仏習合の世界を示すために、重要なものだったのでしょう。

松本平の御正体をみましょう。

1 仁科神明宮（大町市）

別鑄の仏像を貼り付け覆輪を付ける御正体がほとんどですが、仏像を線刻する古い御正体も含め、全部で16体（5体が国重要文化財指定、残りは附属指定）が伝わっています。仏像のほとんどは大日如来、伊勢神宮内宮の天照大御神の本地仏です。「弘安元年卯月一日、大施主平氏女」「弘安九年十二月廿二日、妙法尼」の銘があり、1278年（弘安元）や1286年（弘安九）、鎌



倉時代の寄進であることがわかります。そのほか、「志んめい」「志んめいの」「志んめいの御しやうたい」と記されたもあります。この御正体が、志んめい（神明）、すなわち神明宮のご神体であったことは明かです。

なお、仁科神明宮の神宮寺（金峯山）は、真言宗高野山西禅院の末寺で、現在の社務所の裏側にありました。本尊の十一面観音像は現在は行方不明ですが、盛蓮寺に移された仏像は鎌倉時代の作です。

2 三日市場神明社（白馬村神城）

天照大御神を祀る神明社と建御名方命と誉田別尊を祀る諏訪社が併存しています。社殿は、棟札より土豪の沢渡盛忠と息子が1588年（天正16）に造営を命じています。二体の御正体があり、円形の木板を別鑄の仏像と天蓋と左右の宝瓶を配した銅板で覆い、覆輪つけ銅製の吊り手をつけています。ともに、「大明神御正体・弘安九年十二月廿二日・願主比丘尼妙法」に銘がはいり仁科神明宮と一緒に比丘尼妙法によって寄進されました。仏像は一つが天照大御神の本地仏である大日如来座像、もう一つが諏訪明神の本地仏の普賢菩薩と考えられます。

3 若一王子神社（大町市）

鏡板は失われ、鑄造の仏像のみが残っています。仏像は十一面観音座像で、熊野那智神社第一殿滝宮の祭神大己貴命の本地仏です。鎌倉時代の製作と考えられます。

4 日光寺（安曇野市豊科）

山号は医王山、真言宗です。本尊は高さ11cmの金銅製の打ち出し仏で、摩耗が著しいが、薬壺を持っていることがわかり、薬師如来座像であることがわかります。現在は厨子に納められていますが、本来は鏡板があったのですが外れ、像のみになっています。後鳥羽天皇の守り本尊という伝承を持っています。鎌倉時代以降の製作です。



5 牛伏寺（松本市内田）

山号は金峯山、真言宗です。御正体は寺誌編集集中の調

査で庫裡屋根裏から発見されました。上方の左右に少し飛び出して吊り手用の穴が空けられた円形の銅板に、十一面観音像太くが線刻されています。わずかに背面から打ち出されており像が立体的に見えるようにしてい



牛伏寺御正体

ます。制作年代は鎌倉時代初期まで上る可能性があります。なお、牛伏寺の本尊は十一面観音菩薩立像です。御正体は、境内にある鉢伏権現吊されていたと思われます。

6 旧若澤寺

鏡板が失われ御正体に付けられていた鑄造の銅製の仏像部分が二体伝わっています。一体は、明治初年の廃寺の際に若澤寺から檀家に移されたもので、左手に薬壺を持つので薬師如来とわかりますが、薬壺の位置が膝上でなく、珍しく胸の前に高く掲げています。もう一体は、廃寺の際に盛泉寺に移された、左手の先が失われているため如来の種類を断定できませんが、薬師如来という言い伝えがあります。若澤寺の背後にある白山権現との関連が考えられます。

7 その他の御正体

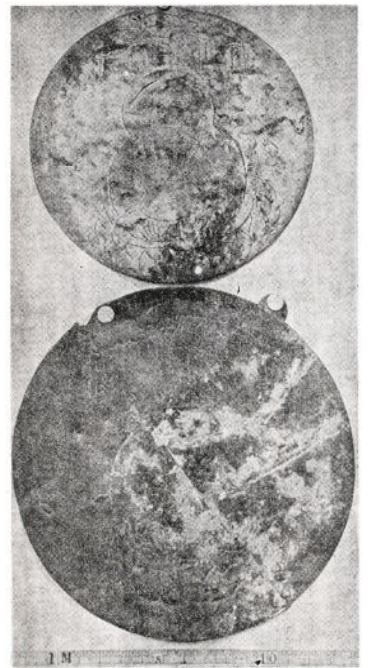
このほか、かつては伊那郡であった小野神社（塩尻市小野）に一体あります。鏡板が失われていますが、そこに付けられた銅製の十一面観音坐像です。製作年代は鎌倉後期と推定されます。

中世に木曾氏によって保護された、水無神社（木曽福島町）には、28体の御正体が伝わっています。円形木板に、後背や花瓶を打ち出した銅板に覆輪を付け、打出仏を貼り付けている御正体がほとんどをしめますが、木板が付かない銅板のみで二つの穴が空けられ、仏像が墨画されている簡易的なものまであります。制作年代は鎌倉時代から室町時代です。

8 穂高神社

三宮穂高神社御造営定日記が1483年（文明15）から1585年（天正13年）の間の九巻が残っています。それらの執筆者は僧侶で、その内の二名は神宮寺の僧侶です。穂高神社と神宮寺が一体となって、僧侶によって運営されていたことがわかります。神宮寺は、本殿のやや西寄りにあり、その創建は南北時代以前といわれています。真言宗、京都三宝院末でした。（天正13）に松川

郷領主松川道文が息子の眼病平癒を、「松尾薬師」（松尾寺）等とともに、「ほかか八くし」に祈願しています。安曇郡のなかでは、薬師としては御利益があることが知れ渡っていたようです。文禄年間（1592～96）には三宮（穂高神社）が15石の社領、そのうち3石が神宮寺の寺領でした。1598年（元禄11）の「穂高組邑々寺社改帳」には、本尊がないが三間三間の薬師堂があり、仁王門があるが仁王像はないと記載されてい



穂高神社御正体

ます。と記載されています。『善光寺道名所図会』では神宮寺跡になっていますので、江戸時代後期には廃寺になっていたと思われます。

実は 2体の青銅製の御正体が伝わっていました。『南安曇郡誌 第二巻上』には、不鮮明なモノクロの写真とともに、次のような説明があります。一つは直径四寸九分（14.9cm）でほぼ円形、天蓋の下に聖観音菩薩像が陰刻されています。なお穴は一ヶ所のみで、吊されたというより柱などに打ち付けられた可能性があります。もう一つは、直径5寸六分（約17cm）で、表面は摩耗が激しく何が刻まれているかはっきりしません。穴は右側の部分は意識的に外側に出されて鏡板が作られています。いずれも細い線で刻まれており、制作年代は鎌倉時代までさかのぼる可能性もあります。

ぜひ、実物が確認でき、観察できたらと思っています。

このように見てくると、松本平の名の通った神社では御正体が御神体になっていたことがわかります。寺院にある御正体も、境内にあった神社のご神体であったのでしょう。

明治の新政府が出した「神仏判然令」は神社を対象として、神道と仏教の分離、すなわち神社から仏教色を取り除くことを目的にしていました。ところが、松本藩では新政府の考えとは違って全国的にも過激な廃仏毀釈が行われました。

その時に、御正体は神社の祠から外されてしまったのでしょうか。神と仏が融合して信仰の対象となっていた時代は1000年以上、神仏の分離が強制されてから、まだ160年しか経っていません。

豊科郷土博物館長

武田信玄の天下取りを考える

池田義光

〔1〕信玄は病死しなければ、天下が取れたか？

1 武田信玄の西上作戦

武田信玄52歳の時、1572年10月、織田・徳川を打倒し将軍義昭を助けて天下静謐を成し遂げるために大遠征「西上作戦」を開始したと言われる。武田軍はまず遠江・三河に侵攻して徳川の各地の城を攻めて連戦連勝し、三方ヶ原の戦いで織田・徳川連合に大勝して、西へ向かった。翌1573年2月に三河野田城を陥落させた。ここから美濃を攻め、織田を破り上洛するかと見えたところで、突然甲斐に引き返した。帰国途上の1573年4月に信玄が53歳で病死した。

2 なぜ天下取りは難しかったのか

それまで武田軍の勢いがすごかったので、信玄が病死せずこのまま行けば、信長を破って信玄が天下をとったのでないかという推測が語られることが多々ある。しかし私は、その考えには否定的である。その理由を以下に述べる。

(1) 農民兵を帰郷させるべき時期

この頃の戦いは一般に秋の収穫後に陣出し、翌年春には帰陣することが多かった。と言うのはこの頃の戦は多くの農民を足軽などとして大量動員しているので、秋の稲などの収穫が終わらないと農民兵を大量動員できないし、春には田植えなどの農作業が始まってしまうので、農民を作業に戻す必要があったからである。武田軍も農民兵が多かったので、信玄の生死にかかわらず、4月は軍を引き上げるべき時期になっていたと思われる。

(2) 大軍による長期遠征の難

2万を超える軍を長期間遠方に留めるには、莫大な兵糧・武器・弾薬を運び続ける必要がある。略奪でまかなうにも限度があり、武田軍は野田城を落とした頃にはすでに補給が逼迫していたと考えられる。いずれにせよ帰国せざるを得なかった。

(3) 戦力の質と量が違う

仮に撤退せず信長と激突したとしても、武田軍は疲弊し、兵士の士気も低下していた。一方の織田軍は畿内で着実に勢力を拡大していた。1573年の榎島城合戦では織田軍7万が動員されたと伝わる。兵数・物資・士気いずれにおいても武田軍に勝ち目は薄かった。

(4) 長篠の戦いの再現

信長は鉄砲を大規模に活用し、1575年の長篠合戦で武田勝頼軍を壊滅させた。もし1573年時点でもこの戦術を幾分かでも導入していたとすれば、信玄軍も敗北した可能性は高い。

以上により、西上作戦の延長線上での「信玄の天下取り」は現実的ではなかったといえる。

〔2〕信玄が若いときに天下を狙っていたら

では信玄に全く可能性がなかったのか。むしろ若い頃から戦略的に動いていれば、信長に先んじて天下を目指せた可能性はある。

1 信玄の前半生

1521年生まれの信玄は、1541年に父を追放して家督を継いだ。以後、信濃侵攻を進め、諏訪・小笠原を打倒して領国を拡大した。しかし東信の村上義清を追い詰めた結果、上杉謙信を呼び込み、1553年から川中島の戦いが始まる。十年以上にわたり繰り返されたこの抗争は決着せず、武田軍に大きな損耗をもたらした。

この時期の信玄には「天下を取る」という大戦略は見られない。目の前の敵との戦いに追われ、消耗戦に陥っていたのである。

2 信長の戦略との比較

一方、織田信長は桶狭間の勝利後、今川領ではなく美濃攻略を優先した。1567年に稲葉山城を落として美濃を手にとると、「天下布武」を掲げ、翌年には足利義昭を奉じて上洛する。この行動には明確な「天下取り」の戦略があった。

信玄が真に天下を狙うなら、川中島に深入りせず、美濃に進出すべきだった。美濃は豊かな経済基盤を持ち、都にも近く、上洛の足がかりとなるからである。

3 「信玄の天下取り」には信長の戦略が参考になる

(1) 信長が天下取りを戦略目標としたのは

織田信長は1567年8月に美濃攻略を達成すると「天下布武」の印判を用い始め、古代中国の故事にちなんで稲葉山城を「岐阜城」と名称を改めたことから、美濃攻略の後に「天下取り」を目ざしたと言われている。しかし私は、信長はもっと前から「天下取り」を戦略目標にしていたと考える。稲葉山城攻略3年前の1564年に妹の市を浅井長政に嫁がせて北近江の浅井氏と結んだのも、目下交戦中の美濃の背後を固めるという狙いの他に、将来の上洛の布石を打ったのだと思う。1567年春に北伊勢を攻撃し一部を支配下においたのも都への足がかりだったのだ。もっと言えば、「桶狭間の戦い」勝利後に今川領に進攻するのではなく都に近づく美濃攻略を目指したのも実は「天下取り」をめざす戦略であったと私は考える。

(2) 信長の「天下取りの戦略方針」

①まずは美濃を攻略し、美濃をその後の上洛と天下静謐（天下取り）の本拠地とする

信長は、1560年5月の桶狭間の戦い勝利の後、勢いに任せて今川勢力下の三河・遠江への領土拡大を図るという方針をとらなかった。勝利の1か月後には、美濃攻めを開始した。これは美濃が豊かな国であったことと、都に近づくという理由があったに違いない。信長の頭に

はすでに上洛と天下取りがあったのではないかと考える。

②美濃攻略後は、上洛の準備をし、上洛を果たす

1) 北近江の浅井氏と同盟を結び、美濃の背後を固め、併せて京都進出への布石とした。

2) 美濃攻略後、伊勢を攻略し、上洛の準備を進めた。

3) 足利義昭の上洛を助ける大義名分で上洛を果たす：

③その後に畿内平定戦を行い、畿内静謐（天下取り）を成し遂げる

4 武田信玄の天下取り戦略方針を考える

(1) 北信攻略に向かわず美濃攻略に向かうべきだった

信玄33歳の時、1553年に、信濃中部制圧に成功した時点で、北信地域侵攻には向かわず、「川中島の戦い」をせずに、美濃攻略に向かうべきだった。

①なぜ美濃攻略を狙うべきなのか

1) 美濃は濃尾平野という豊かな穀倉地帯を抱えている

2) 美濃は都に近く上洛への足がかりとなる：上洛は天下取りの必須条件

戦国大名が、自らの領国ではいかに絶大な権力を持ったとしても「天下人」としての権威・権力は承認されないであろう。戦国時代とは言え、当時最大の権威を持つ天皇（朝廷）と将軍（幕府）を後ろ盾にするしかあるまい。その両方が存在する京都を押さえ、天皇（朝廷）と将軍（幕府）を援ける形を取るために「上洛」は天下取りの必須条件である。

②北信地域はこの段階で狙うほどの意義がない

1) そもそも信濃は山がちで耕地に適した土地が少ないために、人口も領民や兵の数も多くは期待できない。

2) 北信の支配を目指す上杉謙信との長期の消耗戦が必要となる 上杉とは戦うべきでない。

③北条や今川ともできるだけ戦いを避けて、ひたすら美濃征服と上洛を目指すべき

史実の武田信玄は北条氏や今川氏ともかなりの回数戦っているが、上杉・北条・今川とは、多少北信や甲斐の一部を譲ってでも、戦いを避けたい。

(2) 信玄の具体的な天下取りを考える

遅くとも信玄33歳の1553年から天下取りの戦略に取り組むことになる。

①まず美濃攻めを信濃のどこから行うか

信長は美濃攻めのために美濃との境に近い小牧山に築城してここに家臣団を集めて美濃侵攻の本拠地とする「本拠地移転」という当時としては革新的な方法をとったが、信玄も本拠地が甲斐の甲府では美濃まであまりに遠いので、信濃国に本拠地を移動させておくべきである。そこで飯田付近に城を構えて根拠地にするか、深志城を本拠地にしてそこから美濃を攻める方法がある。

②美濃攻めの開始

信長軍も美濃攻めには7年もかかったくらいだから、美濃攻略は簡単なことではない。信長は、1567年8月に斎藤竜興を追放し美濃攻略を達成するのだが、信玄の天下取りのためには、信長が達成するより前に信玄が美濃



1560年頃の勢力図

攻略を達成することが絶対必要である。

③1556年4月20日までに東美濃攻略ができれば

美濃では、斎藤道三から家督を譲り受けた長男・斎藤義龍が、1555年に弟二人を殺害し、父道三に対して挙兵し、翌1556年4月20日に、道三軍2700人と義龍軍1万7千人が激突し、道三が戦死した。武田信玄が美濃攻めをしているなら、この時が大きなチャンスだった。このチャンスに武田軍が1万7千人以上の兵で美濃攻略か、せめて東美濃だけでも征服していれば、1560年の桶狭間の戦いに充分間に合う。

④1560年の「桶狭間の戦い」前までに東美濃攻略

「桶狭間の戦い」までに東美濃だけでも攻略しておきたい。攻略後に本拠地が移転できればさらに良い。桶狭間の戦いまでに東美濃攻略ができていれば、1560年の「桶狭間の戦い」で信長を討ち取るチャンスが来る。桶狭間で今川義元討ち死にの直後には、尾張北部と清洲城ががら空きだったからである。そのチャンスに東美濃から信長を攻めて、その後急成長をするはずの織田信長を倒しておくことが可能になる。この時に信長打倒が実現できていれば、信玄の美濃攻略とその後の上洛はかなり可能性が高まる。

⑤桶狭間の後、美濃を攻略し、義昭の上洛を助け畿内平定戦を行う

こうして1560年までに東美濃を攻略し、信長を打倒しておけば、その後は、信長がやるはずだった戦略方針と同様に、三河・遠江の今川は徳川に任せ、上杉・北条とはできるだけ戦いを避けて、美濃全体を攻略する。それが達成したら、足利義昭の依頼を受けて、大軍で上洛を達成する。その後、天皇と将軍を助け、畿内の平定戦を行い畿内静謐を図ることで、1573年53歳より前に「信玄の天下取り」を実現することができる。

こうすれば「信玄の天下取り」は十分に実現可能だったのである。

狼煙に秘められた山城物語

川崎克之

長野市に転勤して直ぐに病を得て75日間入院した。病室の窓から見える山々を眺めながら、「退院したらあの山々を一つずつ歩いてみよう」と密かに心に決めた。そして実際に登ってみると、そこかしこに戦国期の山城跡が残っていた。調べていくうちに、それらは武田信玄と上杉謙信の戦いに深く関係するものとわかり、私は山を歩きながら歴史を学ぶという、贅沢な“リハビリ”を始めることになった。

その後、高崎へ転勤となり、武田氏と上杉氏の抗争に加えて北条氏や真田氏が絡むようになり、戦国の複雑な勢力争いに益々興味を抱くようになった。そして定年後、安曇野に移り住み、小笠原氏や仁科氏といった地元ゆかりの武将たちの山城を訪ね歩き、またその面白さを伝えたいと思い、安曇野案内人倶楽部で戦国惚けガイドを自称して戦国山城散歩を企画して実施している。今回は、私が心惹かれた、狼煙で繋がりがながらも対照的な二つの山城の物語を紹介したい。



平瀬山城に上る狼煙

武田軍侵攻を告げる狼煙

平瀬古城会の呼びかけによって一昨年から岩原城でも狼煙の打ち上げが行われている。武田信玄の侵攻を迎え撃った山城同士で狼煙を上げようというものだ。高白斎記によると天文20年（1551）10月、武田軍に攻撃された平瀬城は城将以下204名の戦死者を出して落城している。その中には小笠原方に属していた多数の安曇野の武士がいたとされる。

ところが一方の岩原城の堀金氏はこの時すでに武田方に出仕していて平瀬城攻めに加わっていたのだ。当然のことながら岩原城で狼煙の準備を進めていた方々からは疑問の声が聞かれた。攻められる側と攻める側、敵味方同士が狼煙で合図し合うなどということはある得ないのではと。しかし、時間を巻き戻してみると、武田勢の侵攻を急報する狼煙上げのタイミングは確かにあったのだ。

初代堀金盛公、深志で戦死

それは天文19年7月の信玄によるイヌイの城攻めの時だ。武田勢来襲を報せる狼煙が小笠原方の山城で上げられた。岩原城ではそれに呼応する狼煙を上げるとともに

城主の堀金盛公が手勢を引き連れて出陣した。武田勢がイヌイの城を攻め落とすと小笠原方の大城・深志・岡田・桐原・山家の5城が戦わずして落ちたが、堀金盛公は深志で奮戦して戦死している。従って岩原城と平瀬城の狼煙上げイベントはこの時の様子を再現したものと言える。

二代目堀金政氏、武田方に出仕

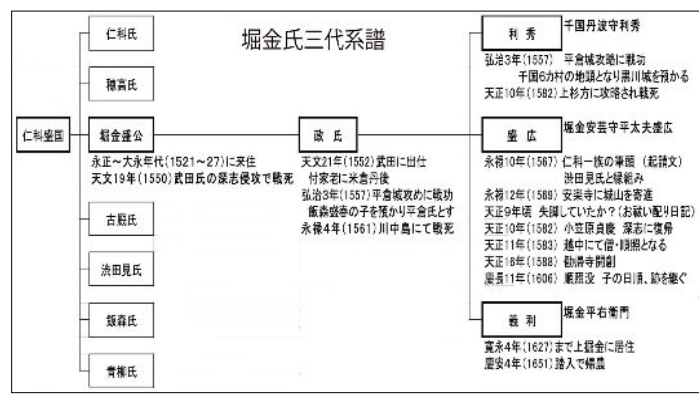
戦死した初代盛公の跡を継いだのが政氏で、仁科氏系の通字である「盛」を使っていないところを見ると、盛公の急死を受けて養子として迎えられたと考えられる。政氏及びその息子らは菅原氏を名乗っており、仁科氏系以外から入ったことが窺われる。政氏の「政」は仁科盛政の偏諱を受けたものとする説もあるが世代が異なる。高白斎記に、天文20年10月深志に入った武田晴信に出仕したとあるのはこの二代目政氏のこと。

堀金氏が他の仁科一族に先駆けて小笠原氏を裏切って武田方に臣従したかのような印象が強くて誤解する向きもあるが、この前年には仁科一族の有力者である仁科道外がすでに武田方に出仕しており、この頃には仁科一族内部で小笠原氏から離反して武田方に従う動きが広がっており、政氏の出仕もそうした動きに同調したものだった。政氏は出仕直後の天文20年（1551）の平瀬城攻めや、翌年の小岩嶽城攻めにも参加していたと考えられる。以後、他の仁科氏の親類・被官とともに武田勢の先方衆、言わば武田軍の弾除けとして各地を転戦することになる。

政氏は弘治3年（1557）の平倉城攻めで戦功を上げ、長子の利秀が千国六ヶ村を預かって千国丹波守を名乗り、黒川山城主となる。しかし、政氏は永禄4年（1561）の最も激戦となった第4次川中島合戦で戦死する。

三代目堀金盛広、失脚して越中に逃亡

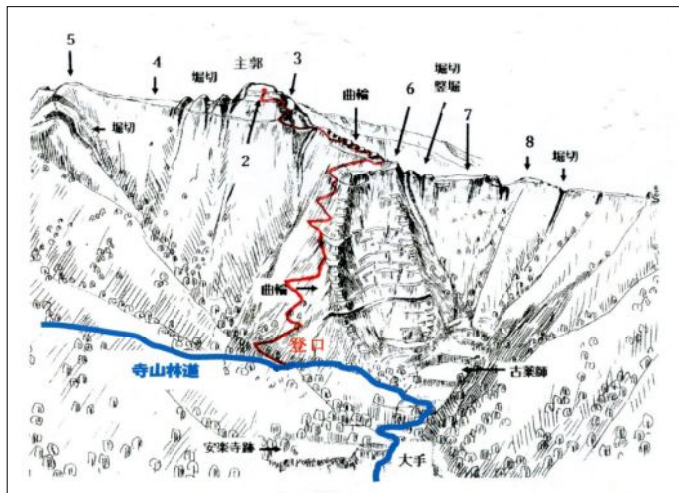
跡を継いだのが次男の盛広で、通字の「盛」を使用している。堀金氏の総領として正式に認められたのであろう。盛広は信玄に服従を誓う証文に仁科一族の筆頭として血判していることから、仁科一族の中で重きをなしていたことが推測できる。親の政氏が武田方にあって活躍したことが評価されたのであろう。しかし、その後武田方に無断で同族の渋田見氏の娘と婚姻したことを咎められて失脚したようで、永禄12年（1569）には城山を安楽寺に寄進して城主



であることを放棄しており、伊勢の御師のお祓い配り日記にもあるように天正9年（1581）頃までには完全に失脚していたと思われる。また天正10年（1582）旧主の小笠原貞慶が深志に復帰した時に帰参した旧家臣の中に堀金氏の名前はない。

貞慶の復帰によって、盛広は親の因果とはいえ報復を恐れたのか妻子と共に越中に逃れざるを得なかった。武田氏侵攻の際に小笠原氏から離反した武将の何人かが、後に貞慶によって謀殺されているから単なる杞憂だったとは言えないだろう。僧侶となった盛広は天正16年（1588）地元に請われて越中砺波に堀金城山勧導寺を開創し、その子孫は現代に至り18代を数える。

堀金氏三代の岩原城



岩原城址（現地看板）

こうした歴代城主の動きから推測できるように、岩原城は一度も戦禍を受けたことがない。初代盛公から三代盛広に至るまでおよそ5～60年間に築かれた段郭や堀切などの遺構が見事に残されており、往時の緊迫した情勢を想起させるに十分なものがある。とりわけ主郭背後の大堀切と北東尾根を断ち切る二重堀切は圧巻で、主郭から東側に降りる段郭群も丹念に構築されている。天下取りの為の城ではもちろんないが、地域支配のための権威を見せつけるには十分な壮大さを持っている城だ。城跡へは堀金霊園から林道をおよそ10分ほど歩くと右手に案内看板があり「堀金の自然と文化を育てる会」が整備してくれた山道を登れば約30分で本郭に着ける。

徹底抗戦した平瀬城

さて、武田軍侵攻の急報を狼煙に託した平瀬城はその時どのような状況下にあったのであろうか。天文19年（1550）イヌイの城の落城によって5つの城が自落すると、小笠原長時は本城である林城に戻れずに、一時平瀬城に撤退し、その後、村上義清を頼って葛尾城に落ちていった。

同年9月1日、武田勢が村上義清の砥石城を攻めて大敗する（砥石崩れ）と、長時は勢いに乗る村上勢の支援を受けて10月21日平瀬城に入り、旧臣を集めて深志城攻略を企てた。



しかし武田勢が村上氏の本拠地に向かうとの報を受けた義清が退去してしまうと、長時の側に残った手勢は僅か100騎ばかりとなってしまったので、深志奪還を諦めて中塔城に引き籠る。

小笠原方の主要な城が自落したなかにあつて平瀬八郎左衛門を城将とする平瀬城は逃げ込んできた将兵を受け容れて、主君の長時が中塔城に退去した後も持ちこたえて、武田勢の安曇野侵攻を阻んでいた。

天文20年（1551）10月14日、村上義清が大町の丹生子城を落としたとの報を受けた武田晴信は、翌日直ちに甲府を出陣して安曇郡を目指した。丹生子城は仁科道外を中心とする親武田派の将兵が入っていたと思われ、ここを落とされると仁科一族内部の勢力の均衡が破れかねない。武田方に恭順を示している勢力を支援するために迅速な出兵の必要性があつたのであろう。

20日には深志に到着、翌日には仁科一族の堀金氏が出仕する。他の仁科系の将兵の帰順をも促して自軍に取り込んだと思われる。それら安曇郡の将兵を先方衆として矢面に立て24日に平瀬城を攻略して城将平瀬八郎左衛門をはじめ204人を打ち取ったのだ。

平瀬城では救援の狼煙を上げたものの、期待していた小笠原と仁科の援軍はついにやってこなかった。武田勢は余勢を駆って小岩嶽の宿城に攻めよせて放火している。

攻略された平瀬城は何処か

高白斎記にある平瀬城は、従来は犀川右岸にある犀乗沢を挟んで聳える平瀬山城とされてきた。しかし、笹本正治氏が「204人も立て籠れるような城ではない」との直感を契機にまとめた論考「平瀬城の位置をめぐって」

（信濃第45巻11号）を発表して以後、平瀬城は奈良井川左岸の自然堤防上にある川合鶴宮八幡宮の地にあつたとする説が有力となっている。平瀬古城会ではこちらの意見も尊重してか鶴宮八幡宮でも同時に狼煙を打ち上げるようになった。

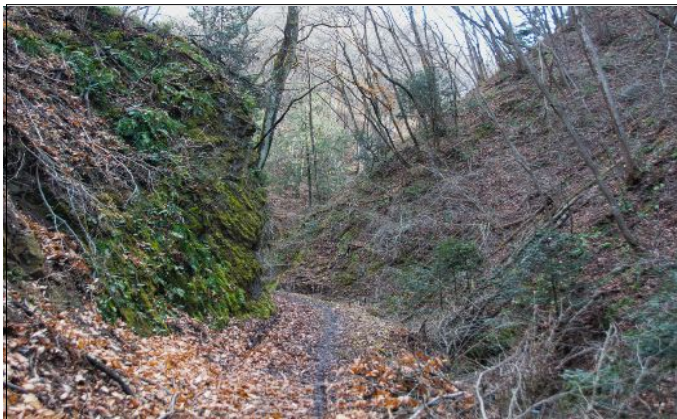
こちらの平瀬城は平城で、平瀬山城と比べると防御的には劣る感があるが、当時は梓川の本流が南側（現在の樽木川）を流れており、奈良井川と合流する辺りには湿地帯が広がって天然の防御ラインとなっていた。流路が現在になったのは江戸時代初期のことだ。梓川以北、安曇郡の最南端が平瀬氏の支配領域で居館もあつた。

城は比高差のある自然堤防上に築かれており、安曇野・筑摩の多くの将兵を収容するには十分な広さと堅固さを有していたと思われる。笹本氏はここに居館と領地があるからこそ多数の犠牲を顧みずに戦ったのだとする。

あるいは必ず援軍は来るものと固く信じていたか、また既に小笠原系や仁科系の武将が入城していたために、逃げることも降伏も出来なかったのかもしれない。

落城後、城割して武田方の城として鍛立てして改修、原美濃守が城将として入り安曇野侵攻の橋頭堡とした。翌天文21年6月には武田晴信が入って、ここから出撃した武田勢が小岩嶽城を攻撃して500余人を打ち取って落城させている。これが仁科一族内の反武田派の最期の抵抗となり、翌天文22年1月、仁科惣領家の盛康が晴信のもとに初めて出仕した。仁科一族挙げての臣従である。

小笠原系と仁科系の勢力を屈服させた後、4月には塔原城・光城など海野系の諸城を降ろして安曇野を平定、5月には役割を終えた平瀬城は破却されている。儀式的な城割と異なり、破却は文字通り城としての体をなさないほど徹底的に防御機能を奪うための破壊であるから、平瀬城跡には遺構らしき遺構は殆ど残されておらず、ただ地形の起伏に往時を想像するのみ。



犀乗沢の犀乗岩

平瀬山城とは何か

では、従来「平瀬城」と考えられてきた山城はどのように考えたら良いのだろうか。平瀬山城は犀乗沢を挟んで北城と南城からなる。北城の主郭部からは松本西部と安曇野一円の展望が得られ、犀川と善光寺道を監視できる要衝にあるが、平瀬氏の居館からも領地からも奈良井川を挟んで対岸にあって遠く離れており、平瀬氏の詰城と考えるには無理がある。小笠原氏の本城を防衛するための支城と考える方が妥当であろう。

丸山楽雲氏は「信濃古武士」のなかで、北城は日岐城主丸山氏の出城で、南城は明応年間（1492～1493）に生坂から進出してきた丸山丹後守が小笠原氏の命で築城したとしている。また、豊科町誌では丸山氏は平瀬氏の寄子だとしているが、丸山氏は小笠原一門であり、平瀬氏以上の有力者であることから寄子ではあり得ないとしている。つまり平瀬山城は平瀬氏に関わる山城ではないということだ。



平瀬山城の主郭から

城跡へは下平瀬の犀乗沢から入る。犀乗沢は伝説の泉小太郎が母の犀龍に乗った場所だとされ、私が勝手に犀乗岩と名付けた巨岩も沢沿いにあり、これも往時の関門で防御施設であつたろう。

平瀬山城は山城の遺構が良く残されているが、武田時代と復帰後の小笠原時代とで二度改修されているとされており、これを誰がどのように整備したかを探るのも今後の課題としたい。

命を賭けた選択の末に

武田勢の侵攻を前に、岩原城の堀金氏は帰順を、平瀬城の平瀬氏は徹底抗戦の道を選択したことになる。戦国の習いとはいえ命を賭けた選択の結果、城将の平瀬八郎左衛門は自刃して果て、堀金政氏は小谷まで勢力範囲を広げたものの川中島で戦死、跡継ぎの盛広は仁科一族の筆頭となるも、武田が倒れ小笠原氏が復帰すると貞慶の報復を避けるために妻子とともに越中に逃れて僧侶となっている。盛広の逃亡は、武士としての終焉であると同時に、僧として一族の記憶を守り伝える始まりでもあった。現代にまでつながる「堀金城山勧帰寺」創建という史実が、その選択の重みと意味を静かに物語っている。

平瀬山城の主郭からの安曇野の展望は格別で、かつての盟友堀金氏の岩原城も見通せる。敗者の宿命としての死を受け入れて自刃したであろう城将の平瀬八郎左衛門義兼の心情を思うと、平瀬山城の方が落城物語には相応しい。そうした感慨もあつて、こちらが204人が討ち死にした「平瀬城」と考えられるようになったのであろう。

平瀬城、そして岩原城、安曇野の二つの城から上がった狼煙には、このように激動の戦国時代を生き抜いた武士たちの物語が秘められてる。狼煙祭りは、単なる再現ではなく、こうした記憶の継承であり、歴史への敬意を示すものでもある。

<参考文献>

- 「甲斐源氏安曇郡へ」・・・逸見大悟
- 「堀金城山勧帰寺」・・・堀金 瑞
- 「平瀬城の位置をめぐる」・・・笹本正治
- 「信濃古武士」・・・丸山楽雲
- 「信濃の山城と館 第4巻」・・・宮坂武男

穂高地域の寺院の沿革

大澤慶哲

明科地域の寺院の沿革についての概要を昨年秋の会報25号に掲載したところ、安曇野市内の他地域についても是非にと依頼があったので、穂高地域からはじめることとした。

安曇野市域は、江戸時代中期水野氏の改易以降、天領となった明科を除き松本藩領であったため、明治初期、松本藩による廃仏毀釈の影響を受け、全ての寺院が廃寺となった。その後明治10年代から、徐々に多くの寺院が再興されたが、場所が変わったり、宗派が異なった例もあるほか、再興されず堂の一部が残っただけの寺院も少なくない。特に、堀金地域のように全ての寺院が消滅した地域もある。

廃寺になり、僧侶は全員還俗を強制され、仏像、仏具は売り払われるなどして多くが散逸した。残った建物は取り壊されたり、学校などに転用された例も多い。仏像などの什物で住民が秘匿し、かろうじて散逸を免れたものもあった。寺院の多くはその歴史を伝える資料を失ったところも多い。

今回取り上げる穂高地域は、昭和の合併で南安曇郡穂高町、有明村、北穂高村、西穂高村が合併して穂高町となったが、江戸時代は松本藩領として、旧有明村は松川組、旧穂高町と旧西穂高村は保高組、旧北穂高村は池田組に属していた。『南安曇郡誌』(昭和43年刊)、『穂高町誌』(平成3年刊)を参考に沿革をまとめることとする。

現在の穂高地域の寺院数は9ヶ寺で、宗派別には真言宗3ヶ寺、曹洞宗4ヶ寺、日蓮宗2ヶ寺である。

創建年代は定かでないものが多いが、おおよその推定

からは、奈良～平安時代3(真言宗の寺院)、中世4(曹洞宗寺院)、明治時代以降2(日蓮宗寺院)となる。

以下、穂高地域の寺院の沿革を簡単に触れる。



栗尾山満願寺

正確な創建時期は判然としないが、恐らく古代にあった「猪鹿牧」に関わりがあると考えられている。現存する最も古い文書である弘治2(1556)年の「満願寺再興勸進状」



微妙橋

によると、「寺は坂上田村麿の創建で、本尊は地湧の靈験あらたか千手観音である。寺は極楽の東門であり、閻魔宮入口で結界の地である。本堂前の川は三途の河で、





満願寺本尊

いる。

坂上田村麿の創建は東国の多くの古寺に伝わっているが、満願寺創建もこの地に伝わる八面大王伝説に関わるとされている。いずれにしても平安時代初めにはこの寺は創建されたと考えられ、穂高牧地区には平安時代初めに編さんされた延喜式に記載された猪鹿牧があり、この官牧を営んだ氏族によって建てられた寺院だと思われる。

明科の潮古墳群6号墳は1辺が20mの大型の方墳で、恐らく七世紀末に安曇野を支配していた豪族の墓とされており、この古墳の周溝から、馬の歯がたくさん見つかり、明科廃寺を創建し、なおかつこの古墳に葬られた氏族の経済力の一つは馬の生産であろうと想定されるが、この氏族は、平安時代の初めには力を失っており、安曇野の政治勢力に大きな変化があり、新たな支配者が登場し、この新たな人々により祈願寺として建立されたと思われる。

中世の満願寺は、資料を欠き詳しいことはわからない。この地を支配した仁科一族である古厩氏によって護持されてきたと思われ、小笠原氏により古厩氏は滅びたが、それ以降も多くの「黒印状」や「禁制札」が保管されており、中興開山の尊應和尚により伽藍が再建され、賑わいを取り戻したと思われる。

江戸時代元禄11年の「穂高組邑々寺社御改帳」によると、本堂や客殿、仁王門など15棟もの建物があり、それぞれのお堂に収められた仏像などの記述があり、大伽藍の立派な寺院であったことがわかる。その後、文化11(1814)年1月火災により多くの建物が焼失し、この時に焼失を免れた重文指定の観音堂(本堂)は昭和21年に火災により焼失した。

市指定文化財として「微妙橋(明治39年建築)」、「聖天堂(明治28年建築)」、「絵馬(慶長7年(1602))」「古文書」がある。

明治3年(1870)には廃仏毀釈により廃寺となったが、明治11年(1878)に再興され、それまでの高野山龍光院末

川にかかる橋(微妙橋)は重罪人は渡ることが出来ない。また、左右の山は死出の山と呼ぶ、道が6つに分かれ136地獄の相を表しており、鬼門に当たる艮の方向に毘羅樹があり、罪障の人が死んでからこの樹に集まること、一度参詣すれば仏の霊験あらたかで罪障消滅の功德があること」などが記されている。室町時代末期のこの時代に、新盆に新霊を迎えに行く習俗が行われていたかは不明であるが、安曇一円のこの習俗につながることを思わせる記述となっている。

から豊山派長谷寺末となった。

有明山神社の神宮寺 五龍山明王院 正福寺



『信府統記』によると「大同元年(806)坂上田村麿が魏石鬼退治の後行基作の不動明王

を安置した」とあり、元禄11年の「穂高組邑々寺社御改帳」には「大同2年の創建で、寺名を高山寺という。焼失により開山の記録が無いが、中興開山の頼応和尚の代に小笠原貞慶から黒印をもらっている。本尊の不動明王は高4尺8寸、前立が2体あり、高2尺7寸。御堂は5間4面茅葺き」とある。また、寛文元年(1661)の村の書状には「明王院は不動坊とも言い、高山寺6坊の一つで、三郷地域一日市場の長徳寺の末寺」と記されている。これらから、この寺は高山寺と言ひ、平安時代前期に創建されたが、その後衰退し、戦国時代末期の小笠原氏の時に再興したらしいことがわかる。

隣接の有明山神社は、有明山を御神体とする山岳修験の拠点となっており、神仏習合の時代であり、山岳修験の霊場として近世は機能していたものと思われる。坂上田村麿伝説のある魏石鬼古墳上の岩上観音堂や古墳も霊場として使用されており、安曇野市内の各所にこうした近世の修験霊場が多く残されており、今後の調査研究により実態が明らかにされるべきと考えている。

明治3年、廃仏毀釈により廃寺となり、明治25年には本堂が焼失、仮堂のまま現在に続いている。明治28年地元の信徒から復寺のための願いが県知事に出され、和歌山県岩出市の新義真言宗本山根来寺の末寺正福寺の寺号を取得し明治31年10月五龍山明王院正福寺となった。

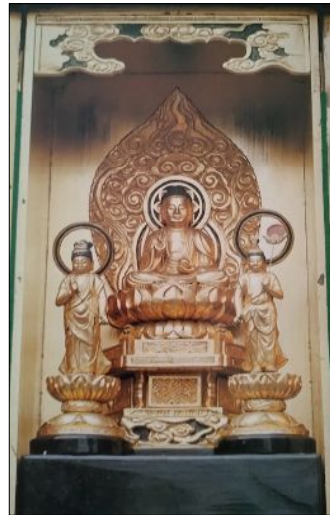
市指定の文化財として不動明王像がある。

鶴王山 松尾寺





寺に伝わる由緒書には「白鳳2年」、信府統記には「弘仁2年」とあり、創建年代は明らかではないが、「琵琶湖から出現した薬師如来を本尊とする」



松尾寺本尊

としており古寺に特徴的な本尊の伝説を持つ。満願寺や正福寺などと同様に猪鹿牧を背景に平安前期に創建された寺院と思われる。その後衰退した時期があり、信府統記には「中興開基は大永8年(1528)仁科朝臣盛政の建立なり」とあることから、室町時代に、この地を支配した仁科一族によって再興されたと思われる。元禄11年の「穂高組邑々寺社御改帳」には「境内東西9町、南北4町、本堂8間6間東向板屋、庫裏9間7間南向高1丈板屋、薬師堂6間6間高2間半小板葺東向本尊黄金仏座像長2寸5分」などと広大な敷地に多くの建物があることがわかる。なお、薬師堂は現在の場所から西方の古屋敷にあり、元禄10年に現在地に移ったと伝えられている。現在でも200mほど登った場所に平坦な場所があり、市史編さん考古部会でこの場所の調査を予定しており、調査結果が待たれる。松尾寺は江戸時代享保3年(1718)等々力町村の真龍院の末寺となり、真言宗醍醐派に属していたが、寛政9年(1797)金200両を納め、醍醐寺直末となった。

明治3年に廃寺となったが、明治25年には医王山松尾寺の公称が許可され、満願寺の境内外の建物として満願寺の管理となり、宗派も真言宗豊山派となった。その後、昭和17年宗教法人格を取得し刈谷原洞光寺管理の末寺となり、高野山真言宗となったが、昭和25年高野山の直末となった。

薬師堂(現本堂)は、室町時代末の大永8年(1528)に建築とされており、大町市の盛蓮寺観音堂と極めて類似しており、この観音堂の建築に関わった仁科氏配下の大工集団によって建築されたと思われる。昭和34年国の重要文化財の指定を受けている。市内の建築物としては最も古い建物である。

廃寺から復活しなかった 牛流山 真龍院

元禄16年(1703)の口上書には来歴が記されており、「牛流山法雲寺と言い、京都醍醐三宝院直末で、度々の



火災で本尊や日記が焼け開基は不明である。江戸時代前期の正保年代に弘秀法印が住職となり寺院山門鎮守などの修理を

行い、中興に努めたが財政難のため薬師堂の復興はならなかった。孫弟子が薬師堂の再建を願い出た」とある。江戸後期の宝暦4年(1754)の什物目録には「本尊薬師 三尊・不動尊・弁財天・地藏尊・などの仏像や、両界曼荼羅2幅・十二天2幅などが記されており、寺院としての面目を示している。幕末の絵図によると、国道西側にあった古寺を東側の現在地に移しており、古寺には客殿、庫裏、衆寮山門、蔵、雪隠、鎮守があり、建替時には客殿、庫裏、衆寮、門、雪隠があった。



真龍院薬師

江戸時代には修験の霊場も各所にあり、宮城の明王院も末寺となっていたことから、真言系の修験の寺院としてそれなりの位置を占めていたと思われる。

明治5年廃仏毀釈と修験道禁止により、廃寺となり、建物が研成学校に転用されている。明治19年還俗していた元の住職牛流氏や地元の有志により復寺の願いを県知事に提出したが、不調に終わり、復寺とはならなかった。国道西側の旧寺跡には歴代住職などのものと思われる卵塔が並び往時を偲ぶことができる。

曹洞宗寺院について

穂高地域には曹洞宗寺院4ヶ寺があるが、何れも室町時代に地域の豪族を開基として創建されている。創建の豪族は戦国時代の攻防でこの地を追われたり滅亡した豪族もあり、盛衰はめまぐるしいものがあったが、やがて江戸時代になり寺請制度がはじまり、檀家制度に支えられ、地域の寺として、現在につながる姿へと変化してきた。

梅林山 正真院

正真院は寺伝によると最初、大町大澤寺の六世宥禅和尚により松川鼠穴の桜沢地籍に作られた小堂という。2代目祖透和尚の代に兵火にかかり焼失したが、小笠原氏の支配となった天正16年(1588)、小笠原氏の配下である細萱河内守が当地の代官となった。この細萱氏を開基



とし、古厩氏の居館址に移転し、梅林山正真院と改称している。



正真院本尊

再建している。

明治3年には廃仏毀釈で廃寺となり、伽藍も山門を除き処分され、本尊も焼却されている。明治25年、辰野町小野の祭林寺末寺の陽谷寺を引寺号として復寺し、後に元の梅林山正真院の旧名に戻している。本尊は廃寺となった三郷村楡の龍峰寺の本尊を貰い請け本尊としている。本堂、山門は松尾寺から移設している。

安養山 青原寺



『信府統記』によると「青原寺は美濃国関の龍泰寺の五世蘭如從賀和尚を開山とし、開基を小岩嶽図書」とあり、寺の開基の位牌と一致している。建立された年代は開山の從賀和尚が、寺の記録によると天文5年(1536)示寂と書かれていることから、それ以前と思われ、松尾寺と同じ室町後期の開創ではないかと『穂高町誌』では想定

している。

青原寺は多くの末寺があったことが記録されており、坂北村青柳の碩水寺は青原寺2世天如正樹和尚が開基し、四世明岩正哲和尚が松本市瑞松寺を、六世雪岩正立和尚が明科雲龍寺を、八世州山正益和尚が上田市室賀の前松寺を、九世松岩正祝和尚が明科龍門寺の中興開基となっており、戦国時代の豪族の関係が伺われて面白い。



青原寺本尊

青原寺は明治4年に廃寺となったが、寺二十三世満庵令充和尚が有志と謀り、明治11年いち早く復寺し、同13年には青原寺の名を復活させている。現在の本堂は明治17年に二十四世全海和尚の代に再建されている。

天井には狩野梅玄の龍の絵が描かれている。

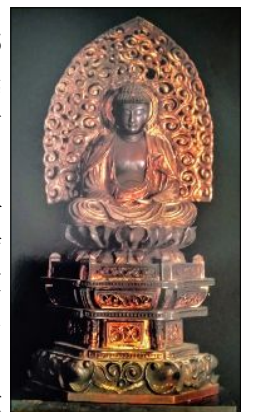
穂高山 宗徳寺



寺伝によると、開創は天正2年(1574)で、仁科氏の一族である穂高氏の2代盛棟とされている。また『信府統記』や元禄11年の覚書などから大町靈松寺13世林山茂道和尚が中興開山とあるので、あるいは前身の寺院があった可能性もあるが、寺を支える有力者に変化があったのかもしれない。

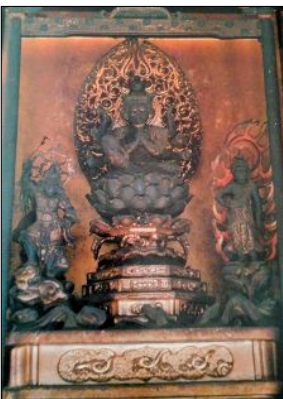
元禄11年の「穂高組邑々寺社御改帳」によると、建物として「客殿平屋6間7間半棟北南東向、庫裏萱葺3間9間棟西東南向」とあり、本堂と庫裏のみであったが、その後歴代住職が、衆寮や鐘楼、土蔵、開山堂などの建設や庫裏の建替などを行っている。

明治4年廃仏毀釈により廃寺となり、住職は還俗帰農している。建物は小学校として使われている。明治13年15世大機良道和尚が仮本堂を建て復寺に向けて活動を開始し、明治17年には県の許可が下りて、宗徳寺として復興し、明治31年には本堂も再建している。



宗徳寺前立本尊

吉祥山 東光寺



東光寺馬頭観音

慶長15年の文書があり、「東龍寺と称し、現在地から亥の方で、寺域が2000坪、場所は昔の北城(現穂高会館付近)にあり、開山の舜廣の先祖が建立。天正18年(1590)開基檀家の等々力氏から土地の寄附があったので、現在地へ移った。」事などが記されており、先行する寺院があり、それは開山である舜廣和尚の祖先が建てた寺であり、それを現在地に移したことがわかる。元の寺院の規模や宗派はわからない。舜廣和尚は、豊科真々部の真光寺の4世で、天正4年から当地へ来て奔走し、堂宇を修理して、天正8年宗派を曹洞宗に改め真光寺の末寺としたと寺伝にある。

元禄11年の「穂高組邑々寺社御改帳」によると「建物として客殿平屋7間11間、衆寮平屋4間半四方、庫裏萱葺4間11間、廊下平屋2間半四方」とかなりの規模の寺院となっている。「本尊馬頭観音座像 長3寸5分 前立不動・毘沙門長3寸8分」とあり、珍しい馬頭観音が本尊となっている。また、市指定文化財として、阿弥陀如来立像がある。東龍寺塔頭の正覚院の本尊だったもので、寺では薬師如来として薬師堂に祀っていたが、像容は来迎印の阿弥陀如来である。像高108cm、室町初期の作と言われる優美な像である。

明治4年廃仏毀釈により廃寺となり13世大雄亮仙和尚は還俗し、建物は学校に転用された。

明治12年等々力村で大火があり、寺も全焼した。12世快龍和尚は大町大澤寺の35世になったが、この時期は既に隠居していた。しかし、この惨状を見て東龍寺の復興を願い、寺のあった土地を買い受け、旧檀信徒の協力もあり、明治24年山梨県の東光寺引寺号として、復興を果たした。

明治時代以降の創建 日蓮宗の寺院

龍尚山 妙法寺

妙法寺は松本市本庄にあった円乗寺(現在は並柳に移転)3世の日透上人が布教伝道の拠点として、地元の熱心な信者の支えで、本尊の日蓮聖人像を円乗寺から移し、



昭和5年に妙法教会を穂高神田町に開設したのが始まり。

昭和21年、日透上人の徒弟である中込義康師が前年に亡くなった師の後を受け、本堂兼庫裏を増築し、龍尚山妙法寺と寺号を公称し、中込氏は3代住職となった。

その後信徒も暫時増加し、道場が手狭になったことから昭和45年本堂を建設し、さらに、宗祖七百遠忌と創立60周年の記念事業として昭和61年から3年計画で、本堂、庫裏の改修、納牌堂の建設を行い寺観を一新した。

信栄山 妙教寺

明治10年、この寺の開祖となる丸山代吉は妻ワキの病



気平癒のお礼参りに夫婦揃って身延山に参詣し、七面山奥の院の別当である日明に弟子入りし、剃髪式を行い代吉は義通日誠、妻は明伝



日堅と名を改めた。そして、日明師の世話で身延山西谷の檀林大教院にあった朝日高祖大菩薩(日蓮大師像)を持ち帰り、翌年自宅に5間四方の堂を建て、妙法講信栄結社の教会分所の設立を松本龍興寺住職などと連署で日蓮宗に願い出て許可されている。明治28年には県知事へも許可を申請し、妙法講信栄結社教会所と公称できることとなった。

明治37年現在地に移転し、昭和17年には名前を有明教会所と改称し、昭和24年に信栄山妙教寺と公称するに至った。

慈母観音

寺には高村光雲作の慈母観音立像が安置されている。これは先の大戦中に疎開をされた東京在住の方から、お世話になった御礼にと昭和42年に贈られたもの。

* 仏像の写真 出典：南安曇郡堂宇寺院佛像写真集
(昭和51年南安仏教会 編)

安曇野の地形と村落立地（４）

矢花和成

１．烏川と北アルプス

①烏川の地形的な特色

一級河川烏川は、北アルプス山系常念山脈の横通岳・常念岳・蝶ヶ岳の東側斜面と鍋冠山北側斜面を源流域として沢水を集め、V字形の深い峡谷を形成して谷口の須砂渡に至り、その下流に半径約3～5kmの広大な扇状地を形成する。その扇央を流れた烏川は国道147号の穂高橋付近で、燕岳・餓鬼岳方面から流下する穂高川（乳房川）に合流する。その長さは約18km、流域面積は88km²である。扇状地の末端は南東側で梓川扇状地と、北側は中房川扇状地と隣接し、松本盆地中部の複合扇状地を形成する。

扇央部の烏川の地形的な特色は、「水無川」と「天井川」をなすことである。大小の砂礫から成る扇央部では、河川水や雨水は地中に浸透して地下を伏流し、扇端部において湧水となるため、扇状地上の河川は、洪水時以外はほとんど水流をみない「水無川」となることが多い。そのため、扇央部は乏水地域として開発が遅れ、堰（せぎ）の開削後ようやく農地や村落が立地した。また、扇状地は洪水時に運搬されてきた大量の砂礫が堆積して形成されたため、堤防で河川の流路が固定されると、堤防の内側に砂礫が堆積して河床が上昇し、周辺よりも高い位置を流れる「天井川」を形成しやすい。烏川の穂高橋付近が天井川に該当し、JR穂高川鉄橋付近では隣接する乳房川の河床より2mほど高い。

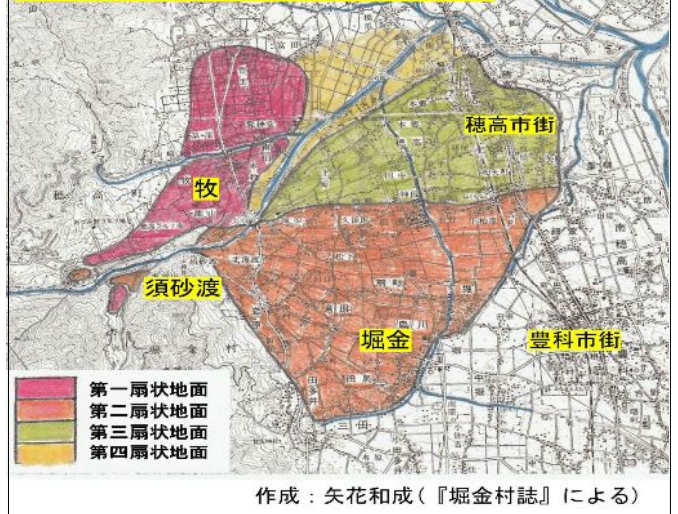
②「烏川」の名称の由来と上流の地質

飛騨山脈東部の常念山脈は、古生代中頃から中生代（ほぼ2億5千万年前～6千万年前）にかけて海底に堆積した泥・粘土・砂などが固まった粘板岩、硬砂岩、チャートなどと、その後にマグマが貫入してできた花崗岩などの岩石からなり、常念岳が両者の境界となっている。よって、烏川の礫は堆積岩が主体で、常念岳から蝶ヶ岳、鍋冠山を中心に分布する粘板岩や硬砂岩、チャートなどの青黒い色合いのものが多く、川砂も同様である。一部に花崗岩も見られる。一方、乳房川（乳川と中房川が合流）の礫は、燕岳や有明山、餓鬼岳を中心に分布する花崗岩が主体で白っぽく、川砂も同様である。以上から、両河川を対比する中で「烏川」、「乳川」という河川名がついた、とされている。一方、川に空州（水のない所）が多いことから、「空州川」が転じて「烏川」となった、とする説もある。

２．四扇状地が複合した烏川扇状地とその段丘化

飛騨山脈と筑摩山地に挟まれた松本盆地の形成は、約70万年前頃から始まり、約15万年前から日本列島の東西圧縮によりこの地域全体が隆起する中で、糸魚川―静岡構造線を境に、「ユーラシアプレート」と「北米プレート」の衝突帯に位置する飛騨山脈の隆起速度が大きくな

図：烏川扇状地の扇状地面区分



り、数万年前には現在のような3000m近い高峻な山脈が形成されていた。これにより飛騨山脈から流下する河川の侵食が激しくなり、盆地に厚く砂礫が堆積し、山麓に大規模な複合扇状地が形成された。烏川扇状地もその一つである。現在の烏川は扇状地の北部を流れているが、その扇状地は、現在の流路を挟んで南側と北側に、つくられた時代が異なり、それぞれ扇頂部の位置が異なる四つの扇状地に分けられ、それらが合成したものである。

最も古い扇状地面は、二ノ沢・本沢合流点付近の「大平原（オデラッパラ）」付近を扇頂として、穂高カントリーゴルフ場から牧、豊里方面に至る第一扇状地面で、その形成時期は約3.5～2.5万年前とされる。扇状地面には乗鞍火山の火山灰が風化した赤土（ローム層、風化して黒土となる）が堆積し、牧地区の特産「牧大根」の栽培に適した土壌を提供する。この扇状地面は国営アルプスあづみの公園穂高口付近から本牧東側付近にかけて、その後の烏川の侵食により形成された段丘崖が発達する。

次に形成された扇状地面は、須砂渡付近を扇頂として南東に広がり、旧堀金村の烏川地区と旧穂高町の西穂高地区の大半を占める第二扇状地面である。その扇端部は田多井・上堀・下堀・柏矢町を結ぶ線で、下堀以東の末端部は万水川の侵食により段丘崖をなす。その形成時期は約1.5万年とされ、北は烏川橋・柏原・柏矢町の線で第三扇状地面に接し、烏川橋南側には段丘崖がみられる。

さらに、数千年前の縄文期には、烏川橋付近を扇頂とした第三扇状地が形成された。旧穂高町上原付近から穂高市街地、矢原・白金・等々力にかけての緩斜面で、東側の扇端は万水川、穂高川の侵食により段丘化し、崖下には湧水が多い。その後、烏川と川窪沢川の合流点付近を扇頂とする第四扇状地面が橋爪、貝梅付近にかけて形成された。これが現在の烏川の氾濫原にあたり、水無川・天井川の景観を呈する。左岸では本牧・南田付近で第一

扇状地が烏川により侵食されて形成された段丘崖をなす。

3. 烏川扇状地と穂高地区の堰（せぎ）

① 烏川扇状地と古代集落

旧穂高町の4世紀から7世紀にかけての古墳時代における群集墳は、中房川扇状地扇頂部の宮城地域から天満沢および富士尾沢の山麓地域にかけてと、烏川扇状地扇頂部に近い牧地域および塚原地域に多く分布する。その他、単独墳としては耳塚大塚と上原古墳が有名である。これらの古墳、特に牧地域の古墳を築いた勢力として、烏川扇状地の扇端部に開かれた水田耕作を基盤とする大規模古代集落の有力氏族（安曇氏）の存在が想定される。この古代集落遺跡は、矢原から等々力にかけて成立し、それを可能にしたのは、烏川扇状地扇端部の豊富な湧水と、烏川から分流した自然流およびそれを改良した縦堰としての「穂高沢」と「柏原沢」であった。また、牧地域は黒色風化火山灰の耕土をもつ沃地で、沢水を導入した原始開発が先行したが、平安時代中頃には信濃十六勅旨牧の一つ猪鹿牧（いがのまき）」がおかれた。

② 自然流を改良した古代の縦堰

「延喜式」に記された穂高神社は、安曇氏一族が治水開拓の神として奉斎した大社であり、神社が立地する烏川扇状地の開発を導いた古代水路が穂高沢と柏原沢である。現在の烏川橋付近で分流した自然流の沢が塚原・幅下の北部で二つに分流し、それがそのまま用水路（縦堰）として用いられたのが穂高沢と柏原沢である。沢筋は、高さ数mの天井川を形成し、そこからさらに樹枝状の枝堰が幾筋にも細かく分岐して、古代集落が位置する扇端部まで流下する。田中集落北側の水田に囲まれた一角に、穂高沢から分岐した芝沢の大規模な天井川の一部が残されている。圃場整備前の土手の高さは約6mにも及び、現在でもその頂上部にエノキの巨木が残る。

古代から中世にかけてこの地域の水田開発に大きな役割を果たしたのがこれらの縦堰（沢）であり、もう一つが肥沃な「耕土」（耕作に適した土壌）の存在である。大量に砂礫が堆積した扇状地は表土が薄く漏水度が高いため農地開発は遅れたが、傾斜が緩やかで水流が弱まる地帯においては肥沃で保水力豊かな土壌が20～70cm内外堆積し、良好な耕土帯が展開して水田や畑地として利用され、古代集落形成の基盤となった。上原古墳辺りから下流の地域には穂高沢、柏原沢と樹枝状に分岐した多くの枝堰に沿って肥沃な耕土帯が分布し、縦堰の微少な水量でも開発可能な適所であったため、矢原～等々力地域の水田開発と古代集落形成に大きく貢献した。

③ 烏川扇頂部で取水した中世以降の縦堰

中世の矢原荘（庄）時代には、この地を拠点とした開発領主たちが、谷口の須砂渡の烏川の岩間に取水口を設けて溪谷の水をせぎあげ、矢原沢をはじめ、堀金地域の扇央・扇端部への北沢・堀金沢・田多井田尻堰および離山北側の牧地域への牧堰の、5本の長大な縦堰水路を開削した。烏川は急流で川底の侵食が激しかったため、上

記の堰の取水口はしばしば上流側に移動した。

矢原沢は、現在の国営アルプスあづみの公園付近の烏川溪谷の岩間水を取水し、塚原・巾上、柏原・長野を経て、柏矢町駅付近で宮沢など幾つかの枝堰に分流して万水川に注ぐ。耕土帯が70cm近いこの地域は、矢原沢によって潤され、矢原神明宮南側には中世の条里開発による広大な水田地帯が形成された。

④ 近世の横堰の開削

近世に入り、烏川扇状地の大半を占める扇央部は依然水利条件が悪い乏水地域で森林・原野に覆われ、また、縦堰の水利権が扇端部の村々にあったため開発が遅れた。また、扇端部の諸村も縦堰の水流が不十分・不安定で水田開発には限界があった。そこで、諸村が協力して流量が安定した奈良井川やその下流の犀川からの用水堰開発に力を注いだ。矢原村庄屋の臼井弥三郎の尽力により、犀川・熊倉から取水した矢原堰が承応3年（1654）に開通した。矢原村、穂高町村を中心にその灌漑面積は440haに及ぶ。矢原堰開通により矢原沢の一部が利用可能になり、柏原村東部で新切（開拓地）が増加した。

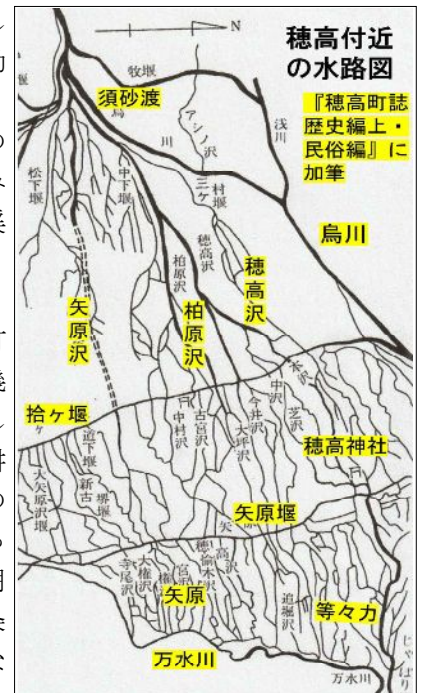
さらに、深刻な水不足と生活困難に悩んでいた柏原村をはじめ、下堀金村や保高村などにおいて新たな灌漑用水開削による水田開発を進めるため、柏原村の等々力孫右衛門・孫一郎と中島輪兵衛、下堀金村の平倉六郎右衛門らを中心に、松本・島内の奈良井川から取水し、梓川を横掘で渡り、下飯田、下鳥羽、中堀、上堀、下堀、柏原、田中を経て烏川に放流する拾ヶ堰が文化13年（1816）に開削され、開墾困難な梓川扇状地および烏川扇状地の扇央部が開発されて豊かな水田地帯へと変貌した。また、その開削によって余裕が出た矢原沢、柏原沢、穂高沢の水を利用して、拾ヶ堰上段の地域に塚原・久保田・上原などの集落が成立し、さらにこれらの地域では昭和36年（1961）以降、ポンプ揚水による水田化が行われた。現在の拾ヶ堰による灌漑面積は約1,000haにも及ぶ。

【参考文献】

『穂高町誌第二巻（歴史編上・民俗編）』（1991）

『堀金村誌上巻（自然・歴史編）』（1991）

『信州大地のおいたち』長野県地学教育研究会（1997）



親子で挑戦 縄文土器作り 川崎 克之



安曇野の縄文人たちは、北アルプスを眺めながら、川辺の集落で火を囲み、木の実を煮る土器を作

っていたことでしょう。川には魚がたくさん群れて、秋には鮭も獲ることができ、山ではシカやイノシシを追い、季節ごとに恵みを得ていました。縄文人にとって、縄文土器は食べ物を煮たり保存したりするための生活必需品でした。

豊かな縄文時代の暮らしに思いを馳せながら、土器を自分で作ってみることで、縄文人にとって土器はどれほど大切な道具だったかを親子で体感していただく体験教室を、この夏、当会と「明科いいまちつくろうかい!!」と明科公民館との3者の共催で開催しました。

やわらかい粘土をこねて、丸めて細長くして、それを重ねて器の形を作りました。親も子も、まるで泥遊びの延長のように夢中になって、スタッフが注意しなければ、水を飲むことも昼食を摂ることも忘れてしまうほどの熱中ぶりでした。

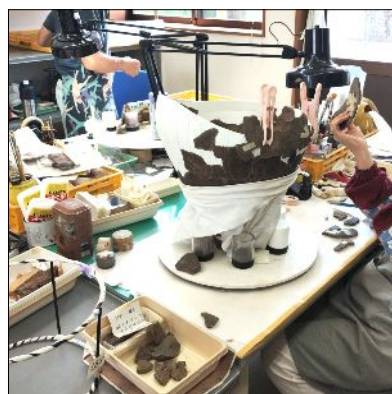
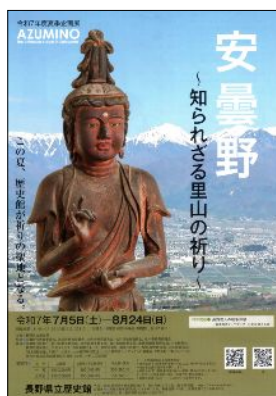
出来上がった作品はおよそ一か月かけて乾燥させてから、当会の会員が野焼きを行いました。猛暑の中、炎の熱さに耐えながらの約7時間の作業でした。

参加された方からは「歴史を身近に感じられた」「遊びの中に学びがあった」といった感想が寄せられました。特に、子どもたちが普段見せない集中力を発揮したことに驚く保護者も多く、親子そろって達成感を味わえる貴重な体験となったようです。

今回のイベントを通じて、当時の暮らしを少しでも実感できたのではないのでしょうか。これからも明科の豊かな歴史や自然を生かした体験活動が広がっていくことを期待したいと思います。

歴史館・博物館巡りの研修会 平林 厚美

8月21日、一日掛かりの研修会を17名の参加で開催いたしました。巡った施設は4カ所で特に企画展「安曇野」が開催された「長野県立歴史館」は見学の目玉となりました。安曇野の範囲を「梓川以北から大町にいたる地」と定義して、この地域における「知られざる里山の祈り」に焦点を当てた内容でした。今回の企画展の中心役を担った総合情報課専門主事的小林寿英氏による長時間にわたる熱い解説がありました。



県内の遺跡等から最近発掘された出土品が展示されている「長野県埋蔵文化財センター」を見学しました。土器の破片を接合して復元するという地道で忍耐のいる作業をしている現場も見学できまし

た。

上田に移動しての見学場所は、真田氏発祥の郷にある「真田氏歴史館」で、真田氏ゆかりの品々が展示されていました。真田氏が上田城を築城する以前に居住していた館跡と御屋敷公園がほぼ隣接して見学できるところでした。真田氏の家紋六文銭は三途の川の渡し賃として棺に入れるもので、武士が戦いに挑んで帰れないという意味を表しているとのことで、六文銭の旗等が市内の至る所で見られました。

最後に、信州上田の文化財の企画展が開催されている「上田市立博物館」を見学しました。帰りは一般道でまっただけの産地を通り、三才山を抜けて安曇野に無事に帰着しましたが、暑い一日でした。

編集後記

猛暑続きの夏も終わり、朝夕めっきり涼しくなってきた。あわただしく過ぎたお盆明けも終わって、今は一息ついているところです。散歩がてらに庄野堰沿いを歩くと、稲刈りが進むにつれて一日で景色が変わります。安曇野の開拓の歴史を学んで安曇人の暮らしぶりを考えたいと思います。(金井透)

今夏、県立歴史館にて開催された里山の祈りをテーマにした「安曇野」展を見学し、あらためてこの安曇野の地で、古人が祈り続け生きてきた足跡と遺物に触れ、今を生きる我々も、変わらぬ祈りを持ち続けているだろうか、考えさせられました。(堀金隆雄)

今号は戦い(戦争・戦闘)に関するものや、信仰(祈り)の世界についての寄稿が多くなりました。この地球上で道具(武器)を作れるのは人間だけですが、時代が進む中で、武器の性能が上がったり、また、それが世界各地に拡散するに伴い、武力衝突も段々エスカレートして多くの人たちの命が失われてきましたし、現在もやむことがありません。この先、一体どうなってしまうのでしょうか(丸山祐之)